

2025年度 第2回 藤沢市立六会中学校 学校運営協議会会議録

開催日時 2025年 9月 30日（火）10時～
場 所 六会中学校 第一会議室

出席委員	<p>滝内 洋子 (前学園都市むつあい協力者会議会長) 五十嵐 直美 (地域コーディネーター 六会地区青少年育成協力会副会長) 堀田 英二 (前六会地区自治連合会会長、六会中学校学習支援員) 尾方 典子 (六会地区民生委員児童委員協議会副会長) 人見 甲子郎 (フリースクール(森の仔じゆうがっこう)事務局長) 江添 達男 (六会市民センター長) 玉置 日菜子 (六会地区担当CSW(コミュニティソーシャルワーカー)) 石川 智美 (六会中学校リーダーズ) 加瀬 晶 (六会中学校校長) 浅場 純子 (六会中学校教頭)</p>
次第	<p>1.開会 滝内会長 加瀬校長 挨拶 2 議題 「本校の生徒支援の現状と学習支援について」 「来年度開級の特別支援学級について」 3.各委員から 4.閉会</p>
協議内容	<p>(意見等) (加瀬副会長) ○生徒支援の現状と学習支援について かけはしルームでは、生徒保護者と十分に面談を行い、目的をもって進めている。介助員、学習支援、教員が協力して行っているが、継続にあたり人手は必要。市全体として人材バンクや研修等の支援体制があると良いと思っている。 放課後学習会は(月)(水)行っており、堀田委員も支援に入っている。10月から学生ボランティアとして大学生も入ることになった。年齢の近い学生とのかかわりは生徒にとっても良い影響があるだろう。 こういった支援ルームの体制は市全体でも進んできているが、家から出ること</p>

が難しい生徒に対しては何ができるか。教員が家庭訪問しているが限界はあるので、なにか手立てはないか。それが今後の課題であると捉えている。

○来年度開級の特別支援学級について

特別支援学級の対象となる生徒に限らず、幅広い支援体制が必要。多様性、その人らしさを育てていくために、どう子どもたちにアプローチしたらよいか。大人より子どもたちのほうが頭が柔らかく、スッと入るのかもしれないが、「みんなちがってみんないい」「その人らしさを大切に」「ともに生きる」ということを伝えていき、支援級が開級するとよい。

ハード面でもできる限り準備して4月スタートを切りたい。本や手芸など、自宅で眠っているものがあれば寄付していただきたい。地域に呼びかけたい。

○部活動指導についての人材

市や県に人材がいらないか問い合わせているが見つからない。指導できる人がいれば教えてほしい。

(石川委員) 今は、障がい児でなく、「その周りの子」を育てるという視点を持っている。大空小学校の元校長の話聞いたが、まわりの子が豊かな心を持つことについて話していた。大人も柔軟な頭でないといけない。

(五十嵐委員) 人格を育てるという意味では、障がいあるなしで分けず、皆一緒に、というのは大事。周りの子が自然とケアする。

(尾方委員) 特別支援学級が開級する経緯を知りたい。

(加瀬副会長) 以前から藤沢市は支援級の全校設置の流れがあり、未設置の3校が来年度4月に開級し全校設置となる。これまで六会中学校の生徒は湘南台中や善行中へ通っていたが、開級にあたり六会中学区内の家庭には意思確認をする。すでに友人関係ができているので転校希望者は少ないかもしれない。

(江添委員) 多様性、インクルーシブについては時間をかけて育んでいくことが大切。『式町水晶氏』の人権に関する講演がとても心に響く。子どもたちにも聞いてほしい内容なので、今年度2年生を対象に人権を学ぶ目的で講演をしてもらう予定。

(山本委員) 親の方針次第で普通級に通うか支援級に通うか決まる。支援級に行くことで安心して学校に通えると思う子もいる。風通しよく、音楽などでリラックスできる環境だと良いと思う。

(加瀬副会長) それぞれのクラスに所属して役割をもちながら、勉強や個々の力を伸ばしていくという部分は支援級で取り組めると良い。

(堀田委員) こどもは差別意識なく関わり合えると思う。支援級開級にあたり学ぶ機会があるなら、保護者にも聞いてもらいたい。

(人見委員) 元々教育には歴史的背景があり、それを打開していく必要がある。講演会だけでなく、生徒、保護者による対話(ディスカッション)の機会もあると良い。議論することが大切で、決して結論は出さない。議論して当事者意識を

もつことが大切。

(石川委員) 先生方も勉強会などするのか。

(加瀬副会長) 開級にあたり、多様性も含め教員の心の準備にも取り組みたい。支援級が開級するこのタイミングは土台作りのチャンスなので、生徒、保護者、教員に対してできることを検討していきたい。

(山本委員) 男性でもファッションとして化粧をすることもある。障がい、LGBTQ+など様々な要素を織り交ぜて皆で考えることができるの良いのではないか。

(玉置委員) 自分の困りごとを打ち明ける時、それを話せる相手かどうか、日々の言葉やふるまいを見て判断する。講演やディスカッションなどの機会を通して、色んな意見があって良いということをお大人も子どもも知っていくことで、多様性の理解が徐々に深まっていくのではないか。

(石川委員) 子どもが本音を言えないのは苦しいと思う。外からの影響がなければ子どもはなんでも受け入れるが、大人が情報を植え付けるのかもしれない。

(人見委員) 学校に行く理由を、“様々なことを諦めるため”だと思っている。人は変えられない、みんなと仲良くはできない、“男は男らしく”が正しいとは限らない、みんな違って当たり前であることを理解する、「ポジティブな諦め」が必要。

(山本委員) 先生も元気でないとそれが子どもに伝わる。先生は苦しくないか。

(加瀬副会長) 教員は子どもと接することがエネルギー。そこに手が回らないのは苦しいと思う。

(石川委員) 保護者の中で「ベテランの先生はあたり。〇〇先生ははずれ」等の話題が出て保護者の不満が波及するという話も講演会の中にあっただが、保護者の思いを子どもも見聞きし、感じ取っている。そのため、そのような発言をする保護者の子と関係性を築くのが難しいことがある。保護者を育てることも大切。

(人見委員) 保護者に対するカウンセリングを長年行っている。相談の入り口は、不登校、学習面、発達面、学校との関係性など子どものことだが、話を聞いていくと、親が社会に承認されているかどうかということなども根底にある。親の抱えている自分の寂しさなどに気付いて向き合うと、子どもも自分のペースで登校できるようになってくる。学校は保護者対応を外部委託するべきだと思っている。子どもは学校に来れば元気になる。

(尾方委員) 保護者同士もグループができる。話せる場がない人もいるだろう。昨今地域のつながりも希薄になっているので、保護者が本音を言える場が必要。

(人見委員) 森の仔じゆうがっこうのフリースクールでは保護者の部活がある。保護者同士のコミュニティは色々なことを吐露できる場でもある。

(石川委員) リーダーズは1人の保護者が集まってできた。楽しんで作品作りなどできるのは、大人の部活のよう。子どものためになにかしたいという保護者はいるし、保護者は学校に行きたい、子どもたちの様子をみたいと思っている。

(五十嵐委員) PTA がなくなると、学校と保護者がコミュニケーションをとるこ

とが難しくなるが、色々なスキルを持った親がいるし、以前は親のサークルもあった。雑談が大事。雑談の中で共通項が見つかり、良い出会いがあるかもしれない。

(人見委員) 保護者の居場所ができると良い。コミュスクで議論は深まるが、実際に現場が変わるにはインパクトが必要。なにかイベントを打つのもよい。

(山本委員) 顧問の件についてはは、日大に声かけるのはどうか。

(江添委員) チーム FUJISAWA 2020 に団体登録すると人材が見つかるかもしれない。

(五十嵐委員) いすずやプレス工業など、企業と繋がるのもひとつか。

(滝内会長) 体育協会も協力できるかもしれない。

(人見委員) 担ってくれる人に対して学校から出せる予算はあるのか。

(加瀬副会長) 学校としてはない。ほぼボランティアという形にはなる。

(人見委員) 以前から、学校にエージェントとSEがいると良いと思っている。エージェントが市や対外的な交渉を担い、システムをSEが作る。そういった仕組みをつくれなにか、市にも相談したい。

(玉置委員) 日大生のほか、慶応大生も地域に出ている。六会でも、老人クラブに声がかかり、まちづくりに関するゼミ研究の一環で「リアル野球盤」を一緒に楽しんだ。学生の力を借りれると良いのではないかと思う。

閉会

次回開催日程 12月16日(火)
会 場 六会中学校